

# 同志社大学

## 2009年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2010年 2月 25 日提出

所 属	職 名	氏 名
文学部	教授	西脇 常記
研 究 題 目	トルファン出土漢語文書（主として漢訳仏典）の研究	
研 究 成 果 の 概 要	<p>20 世紀初めに、ドイツ学術調査隊は、中央アジアのトルファン地域（現在の中華人民共和国の新疆ウイグル自治区）から多くの文物を将来した。その中の漢語文書の 1～2 割は、10 世紀以降（北宋から元）に本格的に始まる木版仏典断片である。</p> <p>日本に入った木版仏典のほとんどは、南の江南地方で出版されたものと言われている。本研究の対象であるトルファン地域に遺された北方中国（遼・金・モンゴル）の木版仏典は、それらとは異なる版式を備え、またテキストも異なるため、大蔵経の歴史を考える上で、殊に貴重な資料である。報告者はその目録作成に従事した。それら最終成果は遠からず世に問うことになるが、その過程でいくつかの発見があった。その中からここでは、仏典の前に付けられる扉絵について報告しておきたい。</p> <p>扉絵は仏典と一体でありながら、宋－モンゴルの時代の実例は少ない。また文字史料の面が看過され、美術（版画）史料として研究されてきたため、これまで仏典研究には活かされてこなかった。この点に注目した報告者は、トルファン文書から得た一枚の扉絵が、13 世紀の元初のものでありながら、北方で北宋と敵対した遼（916－1125）が 11 世紀はじめに出版した契丹版の流れを汲むものであることを明らかにした。トルファン文書の特徴のまず第一は、細かい断片ということであるが、報告者は、各国のコレクションからいくつかの断片をつなぎ合わせて復元し、日本に遺っている江南のものをはじめ多種の扉絵を参照して、上記の結論を得た。これによって、契丹文化のトルファン地域へのひろがりを明示し、ひいては宋－モンゴル時代の中央アジアから日本までの文化交流を考えることに一石を投じたと考える。</p> <p>以上の成果の一部は、2009 年度本学の研究成果刊行助成を受け、出版された『中国古典社会における仏教の諸相』（知泉書館）のⅢの中で発表している。</p>	